

論文審査の要旨および担当者

愛知学院大学

報告番号	① 乙 第 号	論文提出者名	富家 麻美
論文審査 委員氏名	主査	福田 理	
	副査	後藤 滋巳 嶋崎 義浩	
論文題名	就学前自閉症児における洗口の習得過程と 発達年齢との関連		

インターネットの利用による公表用

自閉症児は、コミュニケーション能力の弱さや見通しのつきにくさ、感覚過敏などの問題を有し、歯科診療への適応性が低いことに加え、家庭での口腔衛生管理が困難であることから、齲蝕に罹患しやすい口腔環境にある。齲蝕予防におけるフッ化物応用は、その有用性と安全性が広く確認されており、幼児期からの継続的な応用が望ましい。なかでも、フッ化物配合歯磨剤とフッ化物洗口は、費用対効果の優れた簡便な齲蝕予防法であり、フッ化物の全身応用が実施されていない我が国においては、洗口の習得状況に応じたフッ化物塗布との併用が推奨されている。

しかしながら、自閉症児の歯磨剤使用者率は定型発達児に比べて低いとの報告があり、その主な理由に洗口の未習得が挙げられ、不均等な発達的特徴を示す自閉症児にとっては、洗口習得へのスムーズな段階移行が困難なことが予想される。そのため、自閉症児における洗口の習得状況を段階別に評価し、洗口習得に対する発達的および経験的な心身の準備性、すなわちレディネスについて検討する必要があるとして、就学前自閉症児を対象に遠城寺式乳幼児・分析的発達検査を用いて2つの研究を行っている。

研究1：洗口習得のレディネスを明らかにすることを目的に質問調査を行い、洗口可能群（水の吐き出しが可）と洗口不可能群（水の吐き出しが不可）に分類し、暦年齢および発達年齢との関連を検討するとともに、発達領域毎に（移動運動、手の運動、基本的習慣、対人関係、発語、言語理解）洗口能力の有無を判別するのに最適な発達年齢と、その有効性について検

討を行っている。

研究2：洗口習得における基本的動作の順序性と、フッ化物応用を想定した洗口習得のレディネスを明らかにすることを目的に行動観察を行い、洗口動作を5段階（A：まったく不可、B：コップを口元に運ぶことは可、C：水を口に含み吐き出すことは可、D：水を口腔内に溜めて吐き出すことは可、E：頬を動かして水を吐き出すことが可）に評価し、発達年齢との関連を検討している。さらに、洗口の習得状況を未習得群（水の吐き出しが不可）、やや習得群（水を吐き出すことは可であり頬を動かすことは不可）、習得群（頬を動かして吐き出すことが可）の3段階に分類し、各段階を判別するのに最適な発達年齢について検討するとともに、洗口の習得段階における発達年齢の影響の強さを検討している。

その結果、研究1から以下の点が明らかになったとしている。

1. 洗口能力の有無と暦年齢および発達年齢との関連について

洗口可能群の割合は74.1%（58名中43名）であり、洗口不可能群との間で暦年齢において統計的な有意差は認められなかったのに対し、発達年齢においては、全ての発達領域で洗口可能群が洗口不可能群より有意に高い値を示した。

2. 洗口能力の有無を判別するのに有効な発達領域と発達年齢について

洗口可能群と洗口不可能群を判別する最適な発達年齢のカットオフ値は、手の運動2歳3か月、基本的習慣2歳4.5か月、発語1歳4か月、言語理

解1歳5か月、全領域(6領域の平均)2歳0か月で有意性が認められた。

また、研究2からは以下の点が明らかになったとしている。

1. 洗口の習得段階と発達年齢との関連について

洗口動作の5段階と暦年齢との間に有意な相関は認められなかった($r = -0.12$)のに対し、発達年齢との間には、全ての発達領域で有意な相関が認められた($r = 0.35 \sim 0.53$)。

2. 洗口の習得段階を判別するのに有効な発達年齢について

未習得群とやや習得群を判別する最適な発達年齢のカットオフ値は2歳0か月であり(精度81.6%)、やや習得群と習得群を判別する最適な発達年齢のカットオフ値は2歳6か月であった(精度58.8%)。

3. 洗口の習得段階における発達年齢の影響について

洗口習得の3段階を目的変数とした多項ロジスティック回帰分析から、未習得群に対するやや習得群のオッズは、発達年齢2歳0か月未満に比べ2歳0か月以上2歳5か月未満で19倍、2歳5か月以上で90倍となり、未習得群に対する習得群のオッズは、発達年齢2歳0か月未満に比べ2歳0か月以上2歳5か月未満で15倍、2歳5か月以上で26倍となり全て有意性が認められた。

以上より、自閉症児の洗口は、発達年齢に沿って基本的動作の習得が段階的に行われ、発達年齢2歳0か月を目安に個々の発達バランスを考慮しつつ水の吐き出し練習を始め、その習得にともない頬を動かす練習を進め

(論文審査の要旨)

No. 4

(2000字以内のこと)

愛知学院大学

ていくことが、幼児期自閉症の齲蝕予防プログラムにホームケアとしてフッ化物を積極的に応用できる可能性が増すと結論付けている。

本研究は、自閉症児の齲蝕予防および歯科保健支援を行う上での基礎情報を提供し、小児歯科学のみならず歯科矯正学、口腔衛生学ならびに関連諸学科に寄与するところが大きいと考えられ、博士（歯学）の学位授与に値するものと判定した。

平成26年 1 月 15日